



田舎に帰りたい中国の若者たち



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

先日、雲南省の鳳慶という街に行
った。今や雲南省も発展を始めてい
るが、ここ鳳慶までは高速道路は通
っていない。省都昆明から長距離バ
スで9時間もかかってしまった。そ
のバスの車中であまりに暇なので、
隣に座っていた若者と話をしてみた。

彼はこの街の出身であるが、今は遠
い江蘇省無錫で働いている。ちよう
ど清明節の連休があり、ほんのつか
の間、故郷へ帰り暮参りするつもり
だという。

その彼がバスの窓から外を眺めて
つぶやいた。「これが霧だよな」と。
山道を走るバス、山の天候は変わり
やすく、雨模様になったかと思うと
急に晴れる。そして山裾にきれいな
霧がかかっていたのだ。「無錫の空
に霧がかかることはない。常に空に
は霾ばいだよ」と嘆く。「霾」とは中国
の都市部で起こっている大気汚染、

土煙のことだ。彼は無錫で毎日、故
郷の山霧を思いながら、汚染の中
暮らしている。

「仕事さえあればすぐにでも故郷
に戻りたい」と言いながら、彼はバ
スを降りて行った。彼の勤め先は中
国でも有名な自動車メーカーの関連
会社。収入は安定しており、やりが
いもあるようだが、このような自然
環境の中で育った人間には、今の環
境は耐え難いということらしい。
今回鳳慶で訪ねたのは、街からさ
らに車で30分もかかる山あいの工場
だった。若手オーナーが起業し、村
の若者が何人も仕事をしていて。そ
こで働く李さんと雑談していると
「この職場が無かったら、昆明に残
って仕事をしていたと思う」としみ
じみ言う。

自分の故郷に仕事があったことを
本当に喜んでいた。そして「実は昨

年、昆明の女性と結婚したが、別居
前提の結婚だった」と明かしてくれ
た。

彼は学生時代を昆明で過ごし、そ
こで奥さんと知り合ったが、どうし
ても故郷に戻りたくて、それでも彼
女のことも諦められなくて、このよ
うな決断に至ったという。奥さんは
昆明で働いており、当面同居の予定
はない。「将来子供ができたなら、こ
の自然環境で育てたいのだが、果た
して彼女の同意が得られるか」と心
配顔だった。

実は彼の働いている工場は小学校
の跡地にあり、彼の母校だった。生
徒数の減少により廃校となり、今の
オーナーが村と話して廃校を利用し
て雇用を生み出した。そのオーナー
も自分の家族は昆明に置き、子供は
都会の学校に通っている。「教育環
境はやはり田舎に比べてよい」とい

うのだが、教育環境の中に自然環境
は含まれないのだろうか。オーナー
は毎月数回、仕事と家族のために昆
明と鳳慶を往復しているというから
大変だ。

中国では、農村の都市化が政策と
して掲げられて久しい。これは不動
産開発の新たな手法ともみられてき
たが、実はそこに住む人々の願いを
叶かなえる手法でもあるのかもしれない。
ただし、開発によって自然環境が破
壊され、土煙「霾」に晒さらされること
を望んでいる地元住民などいるはず
もない。

適度に仕事があり、適度に開発さ
れた街がつくられ、そこに住めるよ
うになることは、考えるよりはるかに
難しい。このギャップが少しずつ
でも改善されるのが、今の若者に
とつての真の願いではないのかな、
とふと思った。